県都水戸と御三家ゆかりの史跡

佐藤栄編

渓声出版刊行

県都水戸と御三家ゆかりの史跡

佐藤栄編

渓声出版刊行

県都水戸と御三家ゆかりの史跡 佐藤栄編

渓声出版

県都水戸と御三家ゆかりの史跡

佐藤栄編

溪声出版刊行

県都水戸と御三家ゆかりの史跡

佐藤栄編

溪声出版

県都水戸と御三家ゆかりの史跡

佐藤栄編

渓声出版刊

県都水戸と御三家ゆかりの史跡

目次

第一章　中世後の豪族

佐竹氏略系図……17
中世以来の豪族、佐竹氏の動向……18
常総諸藩の成立と発展……21
幕府の常総諸藩にとった政策……22

第二章　県都水戸と御三家ゆかりの史跡

御三家ゆかりの史跡……25
県都水戸……27

水戸徳川氏略系図……29
水戸御三家の起り……30
水戸藩の財政難……32
水戸藩の天保改革……33
幕府の風雲と開国問題……36
安政改革……37
桜田門外の変……40
天狗党の乱……41
光圀と大日本史……43
徳川斉昭……44

第三章　水戸周辺の史跡

第一節　常陸太田

太田城跡……49
正宗寺……50
佐竹寺……50
西山荘……52
瑞龍山……54

第二節　水戸市内

偕楽園……56
好文亭……58
常磐神社……60
義烈館……61
回天館……61
東照宮……62
神応寺……64
神崎寺……65
八幡宮……66
祇園寺……68
薬王院……69
妙雲寺……70
吉田神社……71

常照寺……72
報仏寺……72
桂岸寺……74
妙徳寺……76
備前堀……77
善重寺……78
千波湖……79
笠原水道……80
第三節　水戸市の外縁
六地蔵寺……83
涸沼……86

大洗磯前神社……88
常陽明治記念館……89
願入寺……90
有賀神社……92
薬師寺……93
小松寺……94
義勇軍の跡……95
日本原子力研究所東海研究所……98
東海原子力発電所……98
第四節　笠間市
笠間稲荷神社……100

笠間城跡……102
西念寺……103

第四章　結城市

結城市……107
結城氏略系図……108
結城合戦……109
結城家法度……111
結城城跡……112
弘経寺……114
称名寺……116

水野忠邦の墓……118
大栄寺……120

第五章　古河市

足利氏略系図……123
古河公方館跡……124
正定寺……126
雀神社……129
永井寺……130
宗願寺……131
光了寺……132

県都水戸と御三家ゆかりの史跡

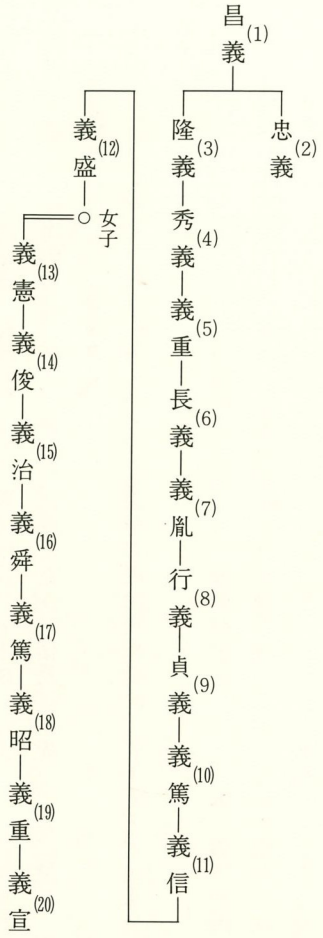
鷹見泉石旧宅……134

付記

水戸の梅……137
水戸納豆……138
笠間焼……139
結城つむぎ……140

第一章　中世後の豪族

佐竹氏略系図


昌義(1)
忠義(2)
隆義(3)
秀義(4)
義重(5)
長義(6)
義胤(7)
行義(8)
貞義(9)
義篤(10)
義信(11)
義盛(12)
女子
義憲(13)
義俊(14)
義治(15)
義舜(16)
義篤(17)
義昭(18)
義重(19)
義宣(20)

中世以来の豪族、佐竹氏の動向

応仁の乱以後およそ一世紀続いた戦国時代も、織田信長の全国統一によって、将軍足利義昭は信長によって追放され室町幕府は滅亡、新時代に進んだが、信長は本能寺の変に敗れ、天下統一の覇業は豊臣秀吉によって継承された。

この時常陸では、佐竹氏の勢力が強大となり秀吉から朱印状を受け、五十四万石の大名となった。

このようなとき佐竹氏では、天正十四年（一五八六）義重が引退し、十七歳の義宣が嗣いだ。このとき佐竹は、北條と相対し、陸奥の豪族伊達政宗は北條と謀って佐竹を北と南から攻めようとした。このような状勢下に佐竹は秀吉と結びついていた。これが決定的としたのは天正十八年（一五九〇）の小田原役であった。このとき佐竹義宣は石田三成のとりなしにより小田原陣において秀吉に謁した。佐竹義宣は秀吉の命により各地に参戦した。佐竹はその功により秀吉政権下の一大名となった。

かねて水戸への進出をねらっていた佐竹氏は、江戸氏の弱点をつき水戸城を奪い取った。江戸重通は親戚の結城を頼って亡命したが、慶長三年（一五九八）この世を去った。

江戸氏を滅した佐竹氏は、電光石火の早さで府中の大掾氏を攻め滅ぼした。江戸・大掾の二大豪族以外の北條方諸族がそれぞれ失却し、地盤を失った。佐竹氏は待望の水戸城進出を完了した。

水戸はその後慶長七年（一六〇二）義宣が秋田に国替えになるまでわずか十一年ではあるが、佐竹氏の居城として栄えた。ここに佐竹氏は、名実ともに常陸の大豪族となり太閤検地の実施によって、文禄四年（一五九五）には、秀吉の朱印状で五四万五八〇〇石の領国を保証された。（全国で八位の大名となった……）。

関ヶ原役と佐竹氏の向背

秀吉政権下で、安定をみた常陸の政治勢力も、慶長三年（一五九八）八月八日秀吉の死によって大きく変化した。それは文吏派といわれる石田三成と、武将派の中心徳川家康の対立激化によるものであった。全国的に大きな力をもった佐竹氏の存在は両者の対立から無関係であることはできなく中立は許されなかった。

とくに佐竹義宣が石田三成から受けた恩義は少なくなく、石田との気脈を通じた秀吉五大名の一人、会津一二〇万石の大名上杉景勝と佐竹義宣とは、父祖以来協力して来た間柄である。関

ヶ原合戦の三ヵ月前のこと慶長五年（一六〇〇）六月、家康によって会津征伐が進められた。義宣は、伊達政宗、最上義光らとともに討伐軍に参加し、陸奥南部の赤郷（福島県棚倉町）に出陣しているのを見ると、家康からの誘いにことわり切れない事情が察せられる。

一方石田方が毛利輝元ら数名の大名が連合し、家康軍攻撃の方針を明らかにし、伏見城攻撃がはじまった。ときに家康は小山の陣中から江戸に引上げ関ヶ原に西上した。こうした情勢の中で、佐竹氏の動きはまことに微妙であった。佐竹氏の重臣の中でも石田方か徳川方か、その向背に議論が相半ばして、結着がつかなかった。こうした中で、義宣は水戸に帰った。このことは家康に不信をもたせる決定的なものになった。

こうした佐竹氏のあいまいな態度のうちに慶長五年（一六〇〇）九月十五日関ヶ原の合戦は徳川方東軍の勝利に終った。

その後の義重・義宣父子は家康に対する恭順そのものであった。義重は隠居の身でありながら、太田の城からわざわざ伏見に至り、家康に謁したりして、佐竹氏の無事を祈る気持があった。ところが関ヶ原役から二年近くになった慶長七年（一六〇二）五月伏見の家康のもとに出向いた義宣に、突如秋田への国替えが命ぜられた。これは明らかに処罰である。しかも領地高も二十万石と決まったが、はじめに不明なほどで佐竹氏にとって冷酷な命令であったというほ

かはない。

四百数十年も常陸に君臨した大豪族が、突如秋田へ移封となると父祖伝来の土地をもって、仕えた多くの家来が問題であった。義宣に伴をしたものは九十三騎であったとか。一家一族の離散の悲話が多かったという。

常総諸藩の成立と発展

佐竹氏の水戸進出で、常総地方に新しい時代が生れたかに思われたが、それもつかの間、わずか十一年の間に秋田国替えになった。あまり突然で非常な措置に、佐竹氏の旧臣の中には、徳川に収められた水戸を奪い戻そうという陰謀もあったが成功せず、すべて徳川の行政権の下に常総地方に新しい大名配置が行なわれ、その政治情勢が一変した。家康は関ヶ原役後に強権を発動して、大名の移動、領地の与奪を思いのままに行ない直轄地の拡大をはかった。

家康は慶長八年（一六〇三）征夷大将軍となり、幕府を江戸に開いて二百数十の大名を統制し、強大な幕府体制の基礎を固めたのである。

幕府の常総諸藩にとった政策

第一　中世以来の旧族を常総から一掃し、新領主による徳川的な地方統治の地盤を築いた。佐竹氏の移封、多賀谷氏が領地を除かれ、結城氏を嗣いだ家康の庶子結城秀康も越前福井に国替えになった。

中世以来結城氏の下にあった水谷氏は備中の国に土岐氏は摂津に移され、常総には中世以来の大名勢力はなくなった。

第二　中世以来の旧勢力を一掃したあとへ御三家である水戸家をはじめ、家門あるいは、譜代の大名を配置したことである。外様大名は麻生藩（一万石）、谷田部藩（一万六〇〇〇石）領地高の低い小大名である。

第三　とくに水戸の地が東北大名に対する防備から江戸の外郭として、重要視されたことである。家康の第五子信吉が、名門甲斐の武田氏の名跡を嗣いで水戸十五万石を領し、慶長八年（一六〇三）信吉病没後は、同じく家康の第十子頼将（のちの御三家紀州和歌山藩主頼宣）を二十万石に封じ、頼将が間もなく駿河に移封になると慶長十四年（一六〇九）十二月三たび家康の実子第十一男の頼房を封じたのである。

第二章　県都水戸と御三家ゆかりの史跡

御三家ゆかりの史跡

水戸城は、那珂川と千波湖にはさまれた台地の東端に位置する。鎌倉時代の初め、馬場資幹(すけもと)がここ（現県立水戸第一高等学校敷地）に館を築いてから、常陸大掾氏の北方の拠点となり、十五世紀の初めに河和田から進出してこの方面に勢力をのばした江戸氏も、ここに拠った。

やがて天正十八年（一五九〇）常陸太田から進出した佐竹義宣は江戸氏を滅ぼして水戸城にはいると、城郭の規模を拡大し、西方に市街をひらいておおいに城下を整備した。

佐竹氏の水戸在城はわずかに十三年間であったが、慶長十四年（一六〇〇）徳川家康の子、頼房がこの地に封ぜられてからは、さらに面目を一新し、東部低地も開発され、城を中心として東西に市街が形成された。西方を主として武士の居住区、東方を商人の居住区としたので、珍らしい双子町となった。西方を上市(うわいち)、東方を下市(しもいち)と今でも呼んでいる。しかし、城は他藩に比べて貧弱で、石垣の城壁も計画はあったが達成されず、天守閣に相当する建物も〝お三階〟と呼ばれるなんの飾り気もない三層楼（一九四五年焼失）であった。大手の堀は、現在六号国道として使用され、橋の擬宝珠は、水戸徳川邸に残されている。

城跡としては、大手の枡形と空堀を残し学校と官庁の敷地になっている。水戸一高正門内に

は旧橋詰門（薬医門・県文化）が復元移築されている。また、橋下の水郡線の線路も、空堀の跡である。旧水戸城三の丸の池が、藩校弘道館（国特別史跡）である。いわゆる弘道館の戦いと昭和二十年の戦災とによって、そのほとんどは焼失してしまったが、正門と正庁、それに続く至善堂（慶喜公退隠の場所）の建物は、奇蹟的に災禍をまぬかれて、今なおむかしの姿をとどめている。

弘道館は第九代藩主斉昭の発意により、藤田東湖や会沢正志斉たちの学者の意見を用いて創立された学校で、天保十二年（一八四一）の仮開館ののち、幾多の人材を教育している。

正門は東に向かい、空堀をへだてて城の大手門に対する。敷地総面積約一万九〇〇〇平方米当時は、正庁（学校御殿――講義や試験が行われた大広間がある）を中心として文館（寄宿舎と研究室――現在梅林）。武館を左右に配し、天文・数学・地図等の館と多くの付属建物、養牛場・薬草園を持つ医学館などがたち並び（現在三の丸小学校敷地）、さながら総合大学の偉容を示していた。敷地西側の大半は調練場と馬場で、乗馬や小銃射撃などの武術調練に使用された（現県庁・県議会議事堂等の敷地）。中央部の広場には、梅林のなかに鹿島神社と孔子廟を配して教学の根源を明らかにし、また弘道館記碑を収めた八卦堂、種梅碑、寄宿生のための時鐘である学生警鐘などもここに置かれた。

県都水戸

県都水戸市は関東平野の北東部常総台地の北部に位置し、県中央部よりやや東寄りに位置する。面積一三五、九六平方キロ米、人口約二十三万人、明治二十二年四月一日に市制施行。昭和八年以来の十二回にわたる近隣町村を合併し現在に至る。

水戸という地名の起こりは定かではないが記録の上では、室町時代からその名がみられる。一般には、「水門」がその語の由来ともいわれる。いずれにせよ、中世以降、歴代の領主が居館を築いた台地先端の地形に由来する名称であると思う。

古代の水戸は那珂国造の中心地で、愛宕山古墳などすぐれた古墳文化が発達した。奈良時代那賀郡（那珂郡）となり、渡里の台地を中心に古代文化が発展した。その後文化の中心は吉田の台地に移り、吉田神社・薬王院が歴史に登場した。中世になると馬場大掾氏・江戸氏・佐竹氏が水戸を支配した。

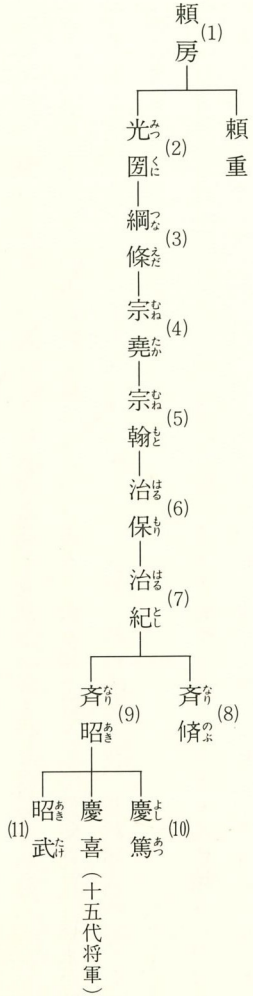
近世にはいると、佐竹氏の秋田移封の後、数年家康の子信吉・頼宣が水戸城主となったが、慶長十四年（一六〇九）家康の第十一子頼房が常陸国下妻城主から、水戸に移封された。ここ

に親藩御三家の一つ水戸藩が成立した。街も城下町として整備され、国鉄水戸駅の西方の台地を上市、東部の低地を下市と呼んだ。

歴代藩主のなかでも光圀（義公）・斉昭（烈公）はとくに名高い。光圀の『大日本史』編さんは明治になって完成した。斉昭・会沢正志斉・藤田東湖らを中心にした水戸学は幕末の志士に大きな影響をあたえた。しかし天狗・諸生の政争は藩の弱体化をまねき、西南雄藩におくれをとる原因になった。

明治四年（一八七一）に旧茨城県の県都となり、さらに、明治八年（一八七五）以降は新治県をあわせた現在の茨城県の県庁所在地となって県政文化経済の中心として現在にいたっている。

水戸徳川氏略系図



水戸御三家の起り

家康の十一子頼房水戸藩主となる。佐竹氏が秋田移封後数年、家康の子信吉・頼宣が水戸城主となったが、慶長十四年（一六〇九）頼房が常陸下妻城主から水戸に移封された。

ここに、藩御三家の一つ水戸藩が成立したのである。街も城下町として整備され、現水戸駅の西方の台地を上市、東部の低地を下市と呼んだ。佐竹の秋田国替え後、常総諸大名のうちで最大の藩は御三家水戸藩である。

藩主頼房は、慶長十四年十二月、七歳で常陸下妻十万石から水戸二十五万石の城主となったときである。その後元和八年（一六二二）二十八万石となったが、公称三十五万石となったのは第三代藩主綱條のときである。水戸藩は尾州や紀州の両藩とともに御三家として、その後格式が定まったのは、寛永年間（一六二四――四三）と推定される。実質的には、家康在世中から特別な待遇を与えられていたのは、尾・紀・水の始祖がすべて家康晩年の子であることを考えると、その事情もわかる。水戸は三家の中で領地も位も低かったけれども、定府制といって尾・紀両家が参勤交代の義務があったのに、水戸だけは藩主が江戸の小石川邸（いまの後楽園は水戸家の庭園の一部）に常住していたため、いつしか天下の副将軍と呼ばれるようになった。

水戸は領地格式ともに尾・紀に劣るけれども定府制にして両家に均衡を保たせる政策だったのかも知れない。しかし水戸では必ずしも満足していたわけではない。とくに江戸には家老をはじめ多くの家臣団を常住させなければならず江戸・水戸両地に藩庁があるような形で経費負担が多く、財政難の原因にもなった。しかし水戸藩が天下の水戸藩として全国的な存在となり御三家に定府制という二つの他にみられない太い柱が立っていたからである。しかし制度的に優越だけでなく、その柱を背景に、藩政確立期は光圀のような見識のある藩主がでて、藩政内外の問題にわたって実力を発揮したからである。

光圀の治世は寛文元年（一六六一）八月初代頼房のあとを継いで第二代藩主となってから、元禄三年（一六九〇）十月綱條に職を譲り退くまでの約三十年間であるが、その後元禄十三年（一七〇〇）十二月太田の西山荘で七十三歳で没するまでの十三年間も藩政を後見し、『大日本史』編さんなどの文化事業を積極的に進めていたのであるから、全体としては四十年の長きにわたって水戸藩の藩政に重きをなしたのである。

光圀の業績は偉大で単なる一藩政でなく、『大日本史』の編さんをはじめ修史事業などの国家的な文化事業を大規模に展開し、日本の学問に大きな役割を果した点にある。

水戸藩の財政難

水戸藩は、定府制で江戸に広大な屋敷を持つ水戸と江戸の二重生活が余儀なくされ、また御三家という高い格式と交際費が多かった。その上『大日本史』を中心とする文化事業などで出費が多く財政難をきたした。

とくに光圀が没する前後から財政難が表面化した。元禄元年（一六八八――一七〇三）から著しくなり元禄十三年（一七〇〇）はじめて藩が領内の富農や城下の町人に御用金を用命している。この年の十二月に光圀は西山荘で没したのである。没後は毎年のように御用金を徴収し財政難は慢性化している。元禄十三年の御用金総額は一万六三三八両で出金者数は一五三人であった。

水戸藩の財政難は元禄から宝永にかけていっそうはなはだしく、藩士の俸禄さえも滞りがちとなり家中の生活に不安を与えた。

藩では藩札（金貨一分……一両の四分一……）を大量に出し、経済の急場をしのいだり、松波勘十郎という浪人事業家を招いて、宝永の新法という積極的開発策を試みたが成功しなかった。藩では財政難を切り抜けるため豪商からの借入策があった。初代頼房時代からあったことで京都方面の富商から借金をしている。

天明前後から大阪借金といわれる大阪の豪商からの借金が多く、その利息だけでも年一万両に及んだという。

藩財政の窮乏を救うため富農や豪商に大金を献金させ、その代わりに郷士に取り立てる方法がとられた。

水戸藩では献金郷士制度がはっきりしている。財政難による売官的性格であった。初代頼房・光圀・綱條の三代だけでも二十名近い郷士がいた。

水戸藩の天保改革

藩政の動揺は、寛政前後から文化・文政・天保にかけて、ますます大きくなり表面化してきた。それは藩政の改革を促す内部からの委任であったがそればかりでなく、外部からの刺激が大きかった。それは頻繁に領域に出没する異外国船であった。とくに文化・文政時代になると異国船の水戸領への接近がいっそう多くなった。

藩政のゆきづまりとともに対外的危機感の高まりのなかで、天保前後に改革を実施した藩も少なくないが、水戸藩ほどの規模が大きいところはない。水戸藩の改革は、天保十二年（一八

四一）老中水野忠邦を中心にした幕府の改革の示唆をうけた点で有名である。

水戸の改革は、文政十二年（一八二九）に第九代斉昭を中心に、天保元年（一八三〇）から同十五年まで改革は続いたが、かならずしもはかばかしくゆかなかった。すなわち途中何回も挫折しかねない情勢であった。改革の中心となった人物は、藤田東湖や会沢正志斉のような人達であった。どちらかと言えば軽格中士であり水戸学者であった。

改革の主なるものをあげると、

第一　質素倹約の励行

政治改革には、奢侈ぜいたくは禁物である。斉昭は士民の、奢侈を禁じ質素倹約令を出し、自ら着用の着物は綿服を用いた。衣食住に関する厳しい達しは、城下は勿論、農村まで行きわたった。農村では、冠婚葬祭などの簡素化が進められ、祭日以外の寄合などは酒を禁止された。

第二　武術の充実

異国船が頻繁に渡来するし、また天保時代には四年と七年の二度にわたり大飢饉があった。水戸領内でも百姓一揆がおこり、斉昭は内憂外患に対処するため武備の充実をはかった。また天保三年（一八三二）海防係を新設し、大砲、火薬を製造し、砲台を湊に築いた。

また斉昭は、農兵設置を計画し、天保十二年（一八四一）に海浜の農民で、二十歳から四十

歳までの身体強健の者を藩の海防にあたらしめた。

第三　学校の設置

文教の刷新を図り士族のための文武の藩校と農村有志のための郷校を建設した。周囲の反対を押切って天保十二年（一八四一）藩校弘道館を水戸城の三の丸に建設した。

第四　財政建直し策

とくに江戸定府により人員を少なくする方策を講じた。天保七年には二五〇〇人の江戸勤務者を二〇〇人を水戸に移住させることなど考えたが不徹底に終ったようである。

第五　殖産興業策

天保元年（一八三〇）には国産係を設け江戸小石川に会所を設けて、紙たばこなど国産品を江戸に収集し、販売させた。

第六　検地をはじめとする農村策

とくに天保年間における人口対策が一層強化されたことである。例えば妊婦届出制を各郡奉行に命じて厳重にし、死産などについては郷医の証明をつけさせ、間引・堕胎を厳重に取締った。また天保四年（一八三四）には七子以上の養育を原則とし、次・三男のうち一人を分家させるため、一戸につき藩から七両を与えた。

第七　社寺対策

光圀の時代に一村一社の制や神仏分離などの宗教対策を実施していたが光圀没後政策前に戻った点もあった。天保改革では、さきの光圀の政策にもどすのが特色であった。しかし領内の寺院の強い反対がありついには幕府を動かし、天保十五年（一八四四）斉昭をはじめ改革派を失却させ挫折せしめた。

幕府の風雲と開国問題

天保改革以後の幕末に大きな衝撃を与えたのは、嘉永六年（一八五三）六月三日米国使節ペリーの来航である。このとき水戸藩主斉昭が幕府の海防参与に任命された。このとき藤田東湖や戸田忠敞（ただあき）ら改革派の人びとが海防係として斉昭を助けることになった。

阿部老中から渡された大統領国書に対して意見を求められた諸侯の答申について開国賛成論が多く通商には反対でもアメリカと戦争を避けるべきであるとの意見が多かった。しかるに水戸のような大藩であり、しかも海防参与の斉昭の意見が尊重されたことは言うまでもない。斉昭から阿部老中に出された「海防愚存」十条五事の建議書に説明されている。十条とは和親すべからざる理由と、五事とは海防の手段五ヶ条である。

和親通商を不可とするのは、米国の強圧的態度を非とし、邪教侵入のおそれからである。五事を要約すれば、武士・百姓に至るまで戦いの覚悟をきめさせ、大砲を鋳造させ、鉄砲の訓練をさせ、海岸の防備を厳にし、農兵にも急務を説いたのである。これにより幕府は大砲の建造を解除し、諸大名に品川台場を築造させたりした。

さて水戸藩を代表する斉昭の見解は、鎖国攘夷主義に見えるが、実は日本の戦力を認め、裏面で和もやむなしとした。すなわち内戦外和であった。しかし事件は急速に進展し、安政元年（一八五四）斉昭は海防参与を辞した。

安政改革

安政元年（一八五四）海防参与を辞した斉昭は、五十五歳、慶篤（よしあつ）は二十三歳、斉昭は天保時代の藩主時代そのままの実権を振った。そこで生れたのが水戸藩の安政改革である。斉昭のもとに藤田東湖・戸田忠敞・会沢正志斉らの改革派であった。水戸藩の改革は、外圧に対する軍備の充実、強兵が主眼であった。軍備の充実は兵器の製造と軍事訓練の強化、軍制の改革は軍事教育の拡大であった。

兵器として大小砲の鋳造であった。

安政改革で軍備充実とともに注目されたのは、教育の振興である。藩校弘道館の教育は弘化以後とかく形式化し、武術を嫌う子弟が多かった。ここで藤田東湖を奉行に任じ、弘道館教育の振興に力を注いだ。弘道館教育とともに郷校の教育改革であった。安政三―四年に九校も新設され、既校と併せて十五校となった。安政二年江戸の大地震で、斉昭の手足となって働いた藤田東湖と戸田忠敞二人が圧死したことは、斉昭にとって両腕をもぎとられたものと同様である。

水戸藩尊攘改革派にとって、大きな痛手であって、安政以後の政局に重大な影響を与えた。とくに藩内党争の激化である。

藩内の党争激化の要因に対し、外部からは将軍継嗣と日米通商条約調印に関する難題が起こり、水戸藩にとっては驚天動地の一大事件がつづき、藩内は蜂の巣をつついたような出来事であった。水戸藩にとっては、苦悩の時期であり、その果ては桜田門事変が起きたのである。

一方将軍家では、第十三代将軍家には病弱のため子がなく、斉昭の第七子慶喜を推すということになった。しかし斉昭はおのれの実子ということで、表面に出られなかったけれども、慶喜擁立を旗印としたことで、紀州慶福（十四代将軍家茂）を推す一派と対立した。紀州藩は譜代の雄藩彦根藩主井伊直弼がその中心であったから、継嗣問題は結局水戸と彦根の対立の形となり政治問題となった。安政二年には斉昭が慶喜を幕府に入れて、政権を専らにするため慶福の毒殺を図ったとか、政府にも取りざたされた。しかし幕府の方針は紀州派に有利に進んだ。

これと時を同じゅうして、幕府と米国領事ハリスとの間にすすめていた日米通商條約の調印について、水戸藩と井伊直弼らとの意見が対立していた。斉昭らは調印に反対し、幕府は京都の孝明天皇の勅許を得ようとし、ここに首席老中堀田正睦（下総佐倉藩主）が、自ら安政五年（一八五八）一月京都に上って條約を勅許したが、不成功に終った。

ところが安政五年四月（一八五八）井伊直弼が、幕府最高の大老職になった。このことは條約反対派にとって青天のへきれきともいうべきものであった。かくして六月十九日歴史的な日米修好通商條約が調印された。水戸藩の斉昭は、慶篤を伴って江戸城にいたり、直弼の勅許を待たずして調印した違勅の大罪人としてなじり追求した。

将軍継嗣と條約調印に敗れた水戸藩と、尊攘派の人びとは、はじめからの理想を貫くため、孝明天皇のことばを仰いで、それに直弼を倒し、幕府政治を改造しようとするが、最後の手段として直弼を暗殺するかの二つの方法を秘密に進めていた。

桜田門外の変

万延元年（一八六〇）三月三日の桜田門外の変は、江戸で起こった大事件であるが、その主体となった人びとは水戸人であり、その事件は水戸藩である。井伊直弼要撃計画は、すでに安政六年（一八五九）八月に水戸と薩摩の尊攘派有志により、翌月中旬実行する約束が出来上っていた。

三月三日は夜来の雪で、早暁よりの吹雪、午前九時頃まで積雪二十センチ米といわれた。この日上巳の節句で、江戸城に上って賀詞を言上するため、大老の駕籠を警固する行列は、外桜田の彦根藩江戸の本邸を出発した。供廻り二十六人、足軽そのほか総勢で約六十人であった。

事件は本邸から五〇〇米ばかり進んだところで起った。現場の指揮者は関鉄之介ら十八名であった。雪をけって行列におそいかかり、瞬時の格闘で大老は首を打たれた。

斉昭は水戸に永久蟄居を命ぜられ、その年の八月十五日仲秋の名月の夜、水戸城中で急逝した。

天狗党の乱

万延元年（一八六〇）桜田門外の変以後、文久元年（一八六一）五月の英国公使館焼打や、同二年の江戸城坂下門外での老中阿部信正襲撃事件などいっそう活発になった水戸浪士の尊攘運動は、元治元年（一八六四）三月二十七日藤田小四郎らによる筑波山挙兵でその頂点に達した。この挙兵にはじまる常総地方から下野までをまきこんで、数ヵ月にわたる争乱を天狗党の乱という。

なお天狗というのは、九代斉昭による「天保の改革のとき、斉昭に登用された会沢正志斉・藤田東湖のような学者で、身分の低い新参者の改革派で学問を鼻にかける連中の意味で、軽蔑して呼んだのが始まりである。筑波山に兵を挙げた藤田小四郎は東湖の四男であった。また天狗党に対して諸生党があるがこれは藩内急進派の鎮圧で力をつくした一派である。

弘道館の文武の学生であったことに由来する。

さて筑波山に陣を張った天狗党は一週間で山を下り、下野（しもつけ）の日光から栃木太平山方面に陣を張り、広く同志を募り再び筑波山にもどった。

当時筑波山には一〇〇〇人を超えるといわれ、幕府の追討軍、その他の藩兵を破って大いに

気勢をあげた。元治元年（一八六四）八月頃には舞台を水戸北東の那珂湊付近に移して、激しい戦闘がくりひろげられた。

しかし戦局は天狗党に不利で、十月下旬頃に那珂湊を退いて久慈郡太子に集結、総大将に六十二歳の耕雲斎を戴くことにし、京都に上って天狗党の心情を朝廷に歎訴することにした。耕雲斎以下八二〇名の部隊が太子を出発したのはその年十一月一日で、途中上野（群馬県）の下仁田や、信州、和田峠などで諸藩の兵士と苦しい戦いを続けて西上し、十二月十六日ついに力つきて福井県の若狭、敦賀で加賀藩に降った。

降伏一隊は、慶応元年（一八六五）正月、敦賀海岸のニシン倉に監禁され、翌二月耕雲斎、藤田小四郎ら三五二名が斬罪、他は遠島、追放などの罪に処せられた。さらに耕雲斎・小四郎ら幹部四名の首は水戸に送られた。

水戸藩は、この天狗党の乱で多くの人材と財力を失い、幕末の改局から大きく後退し、斉昭の子で大きく期待を寄せられた慶喜が、慶応二年（一八六六）八月、十五代将軍に就いたが水戸藩には慶喜を支える力もなく、天下の水戸としての地位も誇りもすべて失ってしまっている。

光圀と大日本史

光圀は、寛永五年（一六二八）水戸城下三木之次の邸に生まれた。頼房の第三子で、母は久子の方（靖定夫人）。六歳で世子に立てられて江戸に移り、三十六歳で封を継ぎ水戸徳川家二代の藩主となり、元禄十三年（一七〇〇）七十三歳で没した。藩主として治績はあまりにも名高い。

修史の事業は、少年時代「史記」の「伯夷伝」に感奮してよりいだきつづけた志業であった。明暦三年（一六五七）、駒込の別荘に史局を設けたことにはじまる。その後史局は小石川藩邸に移され、彰考館と命名された。光圀は各地の優れた学者を招いて事業の推進を図った。「扶桑拾葉集」「礼儀類典」「花押叢」などの出版もした。光圀隠退後は水戸に分局がおかれ、以後しばしば中断しながらも、明治三十九年の完成まで事業が継続された。

紀伝は嘉永五年（一八五二）に刻本に付されたが、それより五十年、ようやく志表の完成をみた。史局開設以来じつに二五〇年、その類例のない大事業であった。

全巻三九七巻、目録五巻である。

徳川斉昭（九代藩主）

幼名虎三郎、字は子信烈公とおくり名とする。

寛政十二年（一八〇〇）三月十二日、七代藩治紀の第三子として江戸小石川の藩邸に生れた少年時代から会沢正志斉・吉田令世らに師事して学徳を積み、文政十二年（一八二九）長兄第八代藩主斉脩（なりのぶ）が死すると会沢正志斉らに推され藩主となり、斉昭となる。

斉昭襲封すると、山陵の修営を幕府に促し、天皇のいみ名の復興を朝廷に奉ずるなどをした。正志斉・東湖を登用して藩政の改革にとりかかった。天保十二年（一八四一）には、藩校弘道館を創設して文武を奨励したが、結城家老など反対する重臣たちもあった。幕府からも疎まれ、弘化元年（一八四四）五月隠居を命ぜられ、封を慶篤に譲り江戸藩邸に幽居した。

嘉永二年（一八四九）三月幽居を解かれペリーが来航して開国をせまると、老中阿部正弘は斉昭を起用して幕政に参与せしめた。

斉昭は対策強硬論を唱え、安政元年（一八五四）三月、幕府が日米和親條約を結ぶとこれに反対し参与を辞した。しかし斉昭を後立てとして、幕政の改革を図る老中正弘の要請により、安政三年（一八五六）再び幕政に参与した。

このころ斉昭は十代藩主慶篤を後見して、弘化元年（一八四四）隠居謹慎令によって中断されている藩制の改革すなわち軍備の拡張教育の振興などに改めて取り組んだ。すなわち安政の改革である。安政二年には那珂湊に反射炉を建設して、翌年大砲の鋳造に成功し、また幕命によって軍艦を建造し、旭日丸と名付け同四年幕府に献納した。

しかし安政四年四月老中阿部正弘が死去すると、幕格内に有力な協調者を失った。斉昭は参与を免ぜられ、翌安政五年彦根藩主井伊直弼が大老になった。直弼はその年五月孝明天皇の勅許をまたないで日米修好通商條約に調印したが、斉昭は外圧に屈するものとして憤慨し、将軍継嗣問題においても、斉昭の実子慶喜が廃され、直弼の推す和歌山藩主徳川慶福が第十四代将軍に決定するなどのことがあって、同月二十四日名古屋藩主徳川慶勝・福井藩主松平慶永らとともに江戸城に登城して、大老の違和調印をなじった。これは斉昭の「不時登城」などというために、斉昭は七月江戸駒込に謹慎を命じられる。

このころ水戸藩をはじめとする尊攘派の志士らが京都にあって策動し、同年八月、孝明天皇から幕政の革新をはかり公武合体の実をあげるようにとの勅諚をとりつけた。勅諚は直接水戸に送られたが、直弼は勅諚を幕府に返納するよう厳命するとともに、勅諚の降下に暗躍した者を捕え、陰謀の根を断つことを決意した。このことが、その年九月に始まり翌年までつづいた

これを「安政の大獄」という。

有名な吉田松陰や梅田雲浜らが捕えられたのはこのときである。斉昭も連座して江戸城中に蟄居を命ぜられた。万延元年（一八六〇）桜田門外の変により大老直弼も在職一年足らずで斬殺された。

斉昭も同じ年の八月十五日、水戸城中において急逝した。

第三章　水戸周辺の史跡

第一節　常陸太田

太田城跡

常陸太田市中城町

交通　常陸太田駅から馬場行バス専売公社前下車。

太田城（舞鶴城）は、佐竹氏約四八〇年の居城で、平安末期に藤原秀郷の子孫通延（みちのぶ）が太田大夫と称して城を築いたのが始まりであるという。長承元年（一一三二）馬坂城にいた佐竹昌義が藤原氏を追って太田城に入って規模を拡大して以後、佐竹氏が慶長七年（一六〇二）秋田に国替えになるまで、常陸に君臨した。その後建武二年（一三三五）九代佐竹貞義が常陸守護に任ぜられ、室町時代に守護大名から戦国大名に成長し、十九代義重・二十代義宣のとき水戸に進出し、五十四万石の大名となった。しかし、関ヶ原合戦で家康の要請を受けなかったため秋田へ移された。太田小学校一帯が城の本丸であった。

江戸時代には、水戸藩領となり、太田御殿がおかれた。この近くに水戸八景の一つ、太田落雁碑、県立太田中学校講堂があり、国の重要文化財に指定されている。

正宗寺

臨済宗円覚寺派　常陸太田市増井町

交通　常陸太田駅から田渡行バス増井下車。

延長元年（九二三）平将門の父良将の創建と伝えられる。始め勝楽寺と称せられた。貞応二年（一二二三）、佐竹四代秀義が勝楽寺の境内に正法院を建て、暦応四年（一三四一）九代貞義の長子周枢月山和尚が師の夢窓院石を招き開山し、寺内に正宗庵を創建した。その後勝楽、正法が争乱のため衰亡したが、正宗寺は佐竹氏の菩提所として保護をうけ、関東十刹の一つと数えられるに至った。

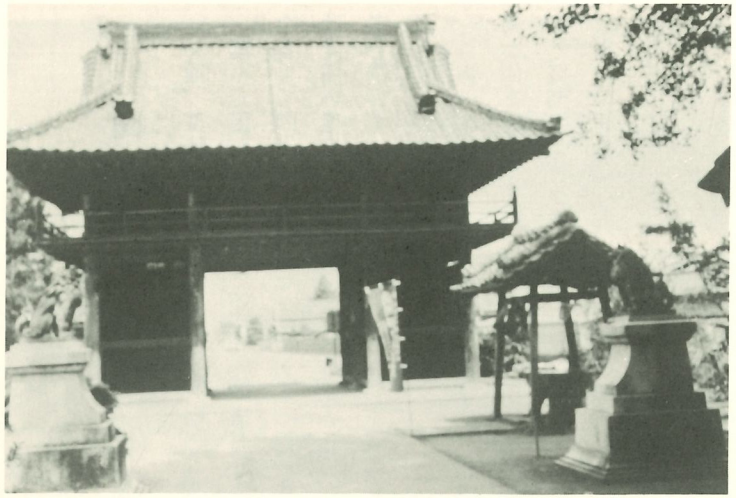
とくに江戸時代には朱印一〇〇石を受け後世水戸藩の帰依も厚かった。境内は約五三〇〇平方米、堂宇も整っていた。本尊の十一面観音は、県指定の文化財になっている。

佐竹寺

真言宗　豊山派　常陸太田市天神林町

交通　常陸太田駅から大宮行バス天神林下車。

寺伝によると寛和元年（九八五）花山天皇の命により元密正人の創建という。初代佐竹昌義の帰依をうけ、代々佐竹氏の祈願所として信仰されてきた。本堂は国の重要文化財として指定されている。



佐竹寺

佐竹寺の由来

西山荘

徳川光圀の隠居所　　常陸太田市

交通　常陸太田駅から大宮行バス西山荘入口下車。

徳川光圀が元禄四年（一六九一）五月から同十三年（一七〇〇）十二月六日七十三歳で亡くなるまでの十年間居たところである。隠居中の一大事業として大日本史（全四〇二巻、水戸藩は光圀の遺志を継ぎ代々の継統事業として、明治三十九年完成）の編纂に力をそそぎ荘内に学者を招いて、日本国内各地から資料を収集せしめ、その事業に専念された。皇室では明治三十三年十一月に正一位を贈られた。

谷あいの小径をたどりついた山懐に、山水を引いて滝や池をつくり、静かな庭に茅葺きの質素な住まい。光圀はここで書を読み、構想を練り、事業をすすめる傍ら、社寺又は民間の人たちと気楽に話を交わされていた。

当時の建物は一五〇年ほど前に焼失し、その一部を復元したもので、現在、県の重要文化財に指定されている。

西山荘

西山　荘

瑞龍山

常陸太田市瑞龍町

交通　常陸太田駅から田渡行バス瑞竜町十六字下車。

国見山のふところが瑞龍山になっている。ここが水戸徳川家の墓所である。

寛文元年（一六六一）、初代頼房を葬って以来、儒礼によって葬られた。墓所は、ち首亀趺、（亀の胴体に竜の首がついている）、馬ひょう封（馬のたてがみのように長い型をした墓）で石をたたみ垣をめぐらした珍らしい形のものである。墓壇の上に細長い石塔をたて、この背後に遺体を埋めて築いたものである。

また山中には水戸藩に強い影響を与えた明の朱舜水の墓もある。

第二節　水戸市内

偕楽園

水戸市常磐町

交通　水戸駅からバス偕楽園前下車。

日本三名園（金沢の兼六園、岡山の後楽園、水戸の偕楽園）の一つ、千波湖をのぞむ台地にある。常磐公園、第一公園ともいう。

公園は、九代藩主徳川斉昭（烈公）が士民と偕（とも）に楽しむという意味で、造ったといわれているが、実際には藩士とその家族しか入園が許されなかったらしい。

その由来や使用規定は、園内の偕楽園記碑に記されている。（烈公の筆に成る）

梅樹は、軍用梅干の用意に植えられたもので、当初は一万本を数えたが、現在は約六十種の三千本だという。春二月になると白梅、紅梅が馥郁（ふくいく）としている。花見どきには、県内外からの観梅客でにぎわっている。

偕楽園（梅林）

好文亭

偕楽園の南西寄り

好文亭は、斉昭公自ら設計し、優雅な姿を誇っている。

昭和二十年の戦災で消失し、昭和三十二年再興されたが、当初のものにならって復元されたものである。

亭は、木造こけら葺き三階建で、面積は三八一三平方米、用材は杉・松を用い、広間は板敷き、天井は檜皮の網皮張り、階下の大広間は、文人墨客を招いて、詩歌の会を催したところである。

好文亭入口

同上二層三階

常磐神社

祭神　光圀（義公）・斉昭（烈公）　　水戸市常磐町

交通　水戸駅からバス偕楽園前下車。

明治六年梅林の一部に奉祀された。元別格官幣社であった。

境内に東湖神社・回天館・義烈館などがあり、神明造の社殿が老樹の間に静かなたたずまいを見せている。

社宝として、珍らしい太極砲と陣太鼓が所蔵されている。

大極砲は口径三五・七糎、砲身一二七糎、口辺の厚さ九糎ともいわれ、天保年間、斉昭公の設計によって鋳造したものである。

陣太鼓は、長さ一八八糎、径一四〇糎、胴はケヤキ材をくり抜いて作られ、胴の表面に、斉昭筆の刻銘がある。斉昭はこの太鼓を軍事教練の際に打ち鳴らして、士気を鼓舞したとつたえられる。

上の写真は常磐神社

義烈館

常磐神社境内の博物館で、二代目光圀、九代目斉昭を中心とした水戸藩の歴史や水戸学に関する資料、書画、工芸品などが集められている。

回天館

この建物は、福井県敦賀市にあった魚を収蔵する「ニシン倉」を移築したものである。

この倉は元治元年（一八〇四）築波山に挙兵した藤田小四郎らが、諸生党との戦に敗れて京都に上る途中、加賀藩に降伏し幽閉された建物である。とらわれた一党八〇〇余名は残酷な仕打をうけ、翌年慶応元年、藤田小四郎ら三五二名が斬殺された。

東照宮

祭神　徳川家康

水戸市宮町

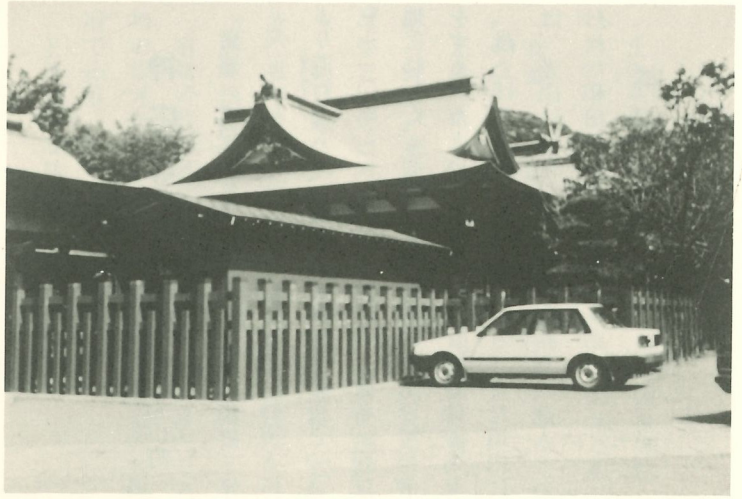
交通　水戸駅の北西方、宮町アーケード街の北側に接する高台にある。

元和七年（一六二一）初代頼房が、家康の霊を祀って創建した。九代斉昭が社領五〇〇石を寄進した。

昭和二十年に戦災で焼失した。現在の権現造りの神殿は、昭和三十七年に再建されたものである。

旧社殿は国宝であった。社宝類も多く、国指定の文化財の銘則包作太刀がある。これは徳川家康の佩刀で、頼房に譲られ後、神社に奉納された。なお境内に横綱常陸山の碑がある。

東照宮



東照宮

神応寺

時宗　水戸市元山町

交通　水戸駅から茨城大行きバス大岡町下車。

天正一九年（一五九一）佐竹義宣の招きにより遊行上人が、藤沢小路に開基したという。寛永一〇年（一六三三）神応寺と改称、現住地に移した。寺宝として雷を蹴りあげて信者をすくったという片足を上げた観音像があり、「蹴上げ観音」と呼ばれている。また境内には、光圀に仕えた田宮流居合斬りの達人といわれた和田平助正勝の墓がある。

上の写真は神応寺

神崎寺

真言宗　笠原山東光院

水戸市天王町

交通　水戸駅から千波方面行バス

常磐神社入口下車。

元亀三年（一五七二）宥恕和尚の中興と伝えられる。東国三十三観音第一番の札所として栄えたところである。昔から安産に霊験ありといわれている。堂宇は本堂、鐘楼、仁王堂、太子堂などがある。境内には四国八十八ヵ所を模した多くの石仏がある。

有賀の代の貞享四年（一六八七）寺内の老松の根元から堀出された経筒は県指定の文化財である。

上の写真は神崎寺の観世音菩薩

八幡宮

祭神　誉田別命ほか

水戸市八幡町

交通　水戸駅から茨城大行バス八幡入口下車

康平年間（一〇五八――六五）京都石清水八幡宮の分霊を勧請して、常陸太田の鎮守であったが、文禄三年（一五九四）佐竹義宣が水戸八幡小路に遷座した。その後、水戸光圀のとき、再び東茨城郡那珂西に移築され、さらに宝永三年（一七〇六）三代綱篤が、今の場所に移し、社観を整備されたとある。

境内は、約七〇〇〇平方米、うっそうと茂る老樹に囲まれている。とくに大木のイチョウは国の天然記念物に指定されている。本殿は、国指定の重要文化財に指定されている。

社宝としては、佐竹義宣の奉納と伝えられる兜がある。県の文化財になっている。

八幡宮拝殿

同上本殿（国宝）

祇園寺

曹洞宗　寿昌山

水戸市八幡町

交通　水戸駅からバス　済生病院入口下車。

元禄五年（一六九二）水戸光圀が、長崎の興福寺に居た中国からの帰化僧心越禅師を招いて創建した寺で曹洞宗寿品派の本山となっていた。

境内地は七〇〇〇平方米、堂宇は近年改築された立派な本堂や元禄七年（一六九四）に建てられた穢跡堂・山門・六角堂などがある。三間一戸、屋根の瓦葺きの山門は、旧水戸藩の三の丸にあった小山田邸の門で、明治維新後、県知事公社の正門として使われ水戸城城門の唯一の遺構とされていた。

寺宝として、出山釈迦像・釈迦大涅槃像・海老釣人物像・十八羅漢像などがあり、いずれも越禅師の筆になるものである。

上の写真は祇園寺本堂

薬王院

天台宗　水戸市元吉田町

交通　水戸駅から奥ノ谷行バス薬王院前下車。

大同二年（八〇七）桓武天皇の勅願によって、最澄が建設したと伝えられる。関東八ヵ国の天台宗の檀林寺（学問所）であって、隆えたところである。大永七年（一五二七）焼失したが、当時の水戸藩主藤原通泰が再建したとある。この寺は吉田神社の別当寺として知られている。境内は、一万七〇〇〇平方米、堂宇は、本殿・客殿・庫裏・仁王門などを整えている。

寺の歴史が古いだけあって、多くの古い仏像類があり本尊の薬師如来と寺宝の木造十二神将像十二体は県の文化財に指定されている。

上の写真は薬王院本堂

妙雲寺

大恵山法雲院日蓮宗
水戸市見川二丁目

交通　水戸駅から見川行バス見川小学校下車徒歩十分。

開基は不明である。天保十四年（一八四三）九代斉昭が、大砲を鋳造するため領内の寺院に梵鐘の献納を命じたとき、従はなかったために廃寺となり、寺地は武田耕雲斉に与えられた。耕雲斉は重鎮であり家老であった。

現在耕雲斉の屋敷跡の大部分が見川小学校の敷地になっており、その傍に再興されたのが妙雲寺である。

境内には耕雲斉一家の墓や光圀に養育された三木之次、武佐夫妻の墓がある。

上の写真は妙雲寺

吉田神社

祭神　日本武尊
水戸市宮内町

交通　水戸駅から奥の谷行バス　吉田神社前下車。

日本武尊が東征のおり、しばらくここに休息し、御旅を朝日にかがやかせたといい、この高台を「朝日三角山」と呼んでいる。延喜式では名神大社に列し、常陸国三の宮となる。社運が鎌倉、室町時代には衰えたが近世初期になり徳川頼房が水戸藩主となってからは再び社運がひらけ光圀の時に社殿を修繕し、以来代々水戸藩の宗敬厚く九代斉昭の時に社領一〇〇石を寄進し領内鎮守となった。

上の写真は吉田神社

常照寺　臨済宗大徳寺派　水戸市元吉田町

交通　水戸駅から奥の谷行バス薬王院下車

元禄十三年（一七〇〇）水戸光圀の開基、品川区東海寺の仰堂和尚の開山、歴代藩主の帰依も厚く、幕末には一〇〇石の朱印をうけている。

長い石段を昇ったところに本堂・庫裏などがあり、あたりはうっそうと茂る樹木や、竹におおわれて閑寂そのものである。寺の一帯は吉田城跡で、鎌倉時代常陸大掾氏の支配であった吉田太郎盛幹の居城であった。水戸城へ入るまでの江戸氏もここにいた。

報仏寺　水戸市河和田町

交通　水戸駅からバス桜川西団地行報仏寺下車

岩間街道を直進すると河和田町に出る。北に天徳寺へ、西に河和田小学校、南西に八坂神社南に報仏寺がある。東西約五〇〇米、南北六〇〇米の広大な地域が河和田城跡で、中世の平城跡、大掾氏の家臣河和田入道貞国が延元元年（一三三七）築いたのがはじめで、やがて江戸通

房、江戸氏水戸入城後は、家臣の春秋氏が約一世紀にわたり居住したが、佐竹氏時代に廃城となった。報仏寺の土塁、堀跡が残っている。

報仏寺は浄土真宗で、親鸞の弟子唯円房開基の水戸地方真言宗教団発祥の由緒ある寺である。

建保六年（一二一八）現在地より南五〇〇米にある心字池のほとりに碑がある。ここに道場があり親鸞上人がたびたびここに滞在したと伝えられる。寺がえの後、衰えたが元禄二年（一六八九）光圀によって再興、現在地に移された。寺は古びて貧弱である。

上の写真は報仏寺

桂岸寺

大悲山保和院　真言宗　　水戸市松本町

交通　水戸駅から茨城大行バス末広町三丁目下車。

八幡宮の北西約五〇〇米のところにある。正式には「大悲山保和院桂岸寺」という。一般には二十三夜尊の呼び名で親しまれている。

天和二年（一六八二）、水戸藩家老中山信正の供養のために子の備前守信治が建てた真言宗豊山派の寺で、檀海の開山と伝えられている。初め香華院といったが元禄七年（一六九四）、徳川光圀が保和院と改め、宝永五年（一七〇八）現寺号を称するようになった。

本堂・仁王門・庫裏などを備えるが、これらの諸堂宇は明治十一年に火災で焼けたのち、大正から昭和の初めにかけて再建されたもの。

本尊の勢至菩薩は行基の作と伝えられ、開運の仏様として広く信仰を集めている。毎月旧暦二十三日の縁日は、三夜参りの人びとでにぎわう。

桂岸寺

桂岸寺

妙徳寺

水戸市加倉井町

交通　水戸駅から笠間行バス　水戸ゴルフ場入口下車徒歩十分。

隠井山高在院と号し、永仁元年（一二九三）、加倉井の領主汲木井弥三郎が、母妙徳尼の菩提を弔って、日蓮の高弟日高上人を開山として建てた一宇が始まりといわれる。日蓮宗では県内最古の寺とされている。

寺の北約二キロ米、水戸ゴルフ場の裏手に「常陸の湯」と呼ぶ鉱泉があるが、ここは文永元年（一二六四）十一月、小松原の法難で傷ついた日蓮が、傷の養生をしたところという。その関係で日蓮は、弟子の日高をこのあたりに送って盛んに布教をさせた。寺を建てた汲木井弥三郎も、このころ熱心な日蓮の信者になったらしい。また弘安五年（一二八二）、身延山中で病いにおかされた日蓮は、常陸の湯へ湯治に来る途中の十月十三日、武蔵国池上（東京都大田区）の池上宗仲の屋敷で息をひきとった。

湯は無色透明の重炭酸カルシウム泉で、胃腸病・神経痛などに効くとされ、今も利用者が多い。ひなびた湯宿が一軒ある。

寺も始めはこの常陸の湯の近くにあったが、応永四年（一三九七）江戸通房の兵乱に焼け、応永十二年（一四〇五）今の場所に再興された。常陸の湯が寺の奥の院とされている。

境内地は約三〇〇〇平方米、堂宇は本堂・庫裏・山門・鐘楼などを備える。寺宝として日蓮の筆跡数通と日高筆の曼荼羅などが所蔵されている。

備前堀

水戸市裡一丁目

水戸駅東方の裡一丁目にかかる橋を「魂消橋」といっている。江戸街道の出入口で、藩士の見送りや出迎えにはこの橋を境にした。橋のそばに小さな社があるが竈神社という。

備前堀は、千波湖の溢水予防をかね、耕地一〇〇〇町の開墾用水路として慶長一四年（一六〇九）、伊奈備前守忠次によって開削されたもので、千波湖柳堤門から水をとって常澄村東前池の全長約十三キロ米である。

善重寺

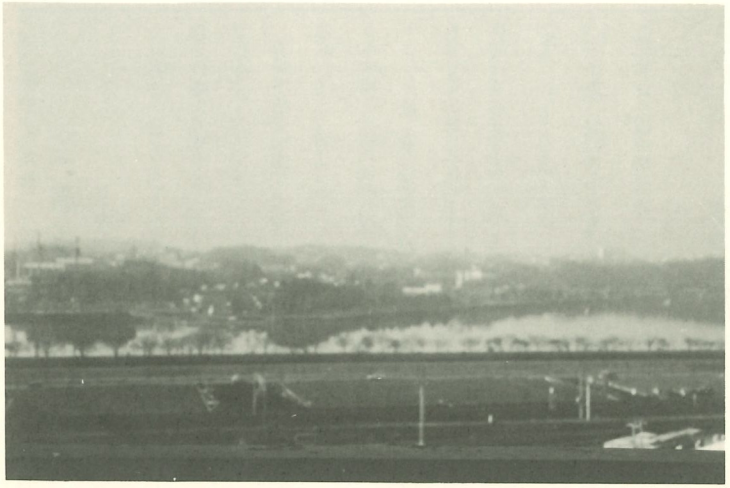
浄土真宗

水戸市涌門町

交通　水戸駅から青雲台方面行バス
　　酒門坂上下車。

貞永元年（一二三二）三浦義重が親鸞に帰依して善念と称し、那珂町に開基したが、のち寺勢衰え、その後幾多の変遷を経て、寛文二年（一六六二）現在地に再興された。明治初年の兵火にかかり寺は消失したが、聖徳太子の立像は難を免れた。国の重要文化財に指定されている。この像は、髪を美豆良に結い、左手に柄香炉、右手に笏を持つ十六方孝養太子の像で鎌倉時代の作といわれている。

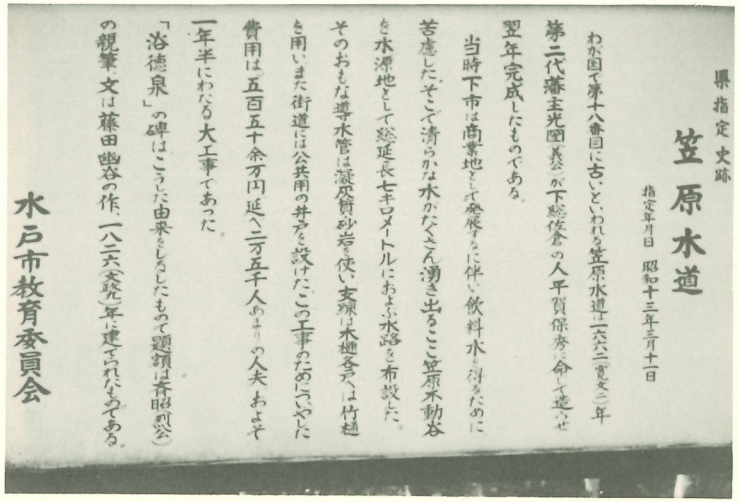
善重寺の裏手に酒門共有墓地がある。この墓地は、水戸藩士の墓で光圀によって設けられた。上の写真は善重寺



千波湖の一部

千波湖

偕楽園の南東に隣接する。東西一三〇〇米南北三五〇米のひょうたんの形をした湖水である。大野郷の灌漑の用水と水戸城の防禦に使われている。湖岸をとりまく三キロの歩道には、数百本の桜並木があり、青い湖水と対照が鮮やかである。また「月の眺めは千波沼」と磯節にも歌われている通り、眺望はすばらしく、昔から文人墨客の訪れるものが多い。



笠原水道

交通　水戸駅から松沢方面行バス
畑中下車十分。

千波湖の南方二キロ米の不動谷に、下市へ通じる笠原水道である。二代光圀が寛文三年（一六六三）水戸藩士で数学者で名高い平賀保秀に命じて飲料用水をひらかせたとき水源として、石をたたんだ施設である。小川のかたわらには、藤田幽谷の碑文があり、その由来をつたえている。水道は延長七キロ米に及び、人夫二万五千人、費用五五〇両といわれている。

上の写真は笠原水道の由来書

第三節　水戸市の外縁

六地蔵寺

真言宗豊山派　　常澄村大反田

交通　水戸駅から大洗行バス六地蔵前下車五分。

村の北西部、国道五十一号線から南西へ四五〇〇メートルほど入ったところにある。俱解山聖宝院と号する真言宗豊山派の寺で、寛平三年（八九一）の創建といわれる。本尊に六体の木彫地蔵尊をまつっているところからこの名がある。地蔵尊は、安産・小育てに霊験ありとして信仰を集めている。

寺の中興に尽くしたのは、室町時代中期に出た恵範法印で、学問に秀れ、書籍の収集・筆写につとめ、二〇〇〇余冊にのぼる書物を寺に残し、天文六年（一五三七）七十六歳で世を去った。のちここを訪ねた光圀は、その蔵書の保存をはかり、「大日本史」の編さんに役立てたといわれる。

近世には朱印三十五石を有する朱印寺として栄え、水戸藩内の真言宗四壇林（学問寺）の一つとして、参集する修学僧たちでにぎわった。

境内は広々として閑静で、樹令数百年の大イチョウ（左に）・大杉（右に）がそそり立ち、

庭の中央には、光圀が感嘆したという枝垂れ桜の老樹が、ゆたかに枝を垂れている。

堂宇は本堂・庫裏・鐘楼堂・四脚門などを備え、うち恵範が入山した当時、すなわち室町中―後期の建立とみられる茅葺、切妻造りの四脚門が、県の文化財に指定されている。

寺内には、立原翠軒の父蘭溪(らんけい)や、明治になって「大日本史」の完結に努力した栗田寛の墓がある。

またみるべき寺宝類も多い。絹本着色両界曼荼羅二幅・絹着色弘法大師像・絹本着色真言八祖像八幅数多くある。いずれも県の文化財に指定されている。

六地蔵寺本堂

六地蔵寺

涸沼

東茨城郡茨城町・大洗町

交通　水戸駅から涸沼行きバス終点下車。

面積約九五平方キロメートル、湖岸の長さ二十二キロメートル、水深は二メートル――三メートルの淡水湖である。

この沼は、涸沼川の下流が陥没してできた吃水湖で、満潮のときは、那珂川から海水が逆流してくる。そのためここには、淡水魚のほか海の魚も棲んでおり、太公望たちにとっては、甚だ興味のある釣り場となっている。

この湖で獲れる魚は、ハゼ・ボラ・コイ・フナ・ウナギなどをはじめ、その種類は五十八種にものぼり、とくにニシンなどは本場の北海道よりも一足早く水揚げされ、春の味覚を提供してくれる。

また、ウナギの稚魚は、種ウナギとして毎年大量に浜名湖に送られ、湖岸近くでとれるシジミもワカサギやハゼなどとともに出荷されている。

この湖に映える秋の月は、昔からひろく賞揚されてきたもので、徳川斉昭が水戸八景を選んだとき、広浦がその中に加えられた。沼の北岸、下石崎の松林の中に、「広浦秋月」という斉

昭の筆になる碑が建っており、いまなお昔ながらの風致を残している。（県指定名勝）

下石崎から沼畔沿いを西に進むと、上石崎の親沢の鼻（県指定名勝）につく。岬のように突出した砂州に松がしげり、岸辺にさざ波が寄せ、下石崎の広浦におとらぬ景勝の地である。近くに茨城大学臨湖実験所がある。

湖岸の砂州と松の名木が多かったが、最近松がかれてしまい景観が失なわれている。また小舟に乗り釣をする客が多いので、付近に船宿が多く、観光用の宿泊施設がある。

上の写真は涸沼

大洗磯前神社

祭神　大己貴命・少彦名命　　大洗町磯浜

交通　大洗駅から東へ徒歩十分。

大洗海岸の南寄り、大洗岬背後の台地上にある。文徳天皇の斉衡三年（八五六）の創建と伝える古社で、翌天安元年（八五七）官社となり、延喜の制では、「大洗磯前薬師菩薩神社」として、名神大社に列している。

武神として、また家内円満・航海安全の守護神として士庶の崇敬を集め、永禄年間（一五五八――七〇）兵火に焼けたが、享保十五年（一七三〇）、徳川家三代綱條が、諸社殿を再建、寄進した。今の本殿と拝殿は、綱條が建てた当時の遺構をそのまま伝えたもので、県の文化財に指定されている。今次大戦前では、国幣中社という高い格式をもっていた。

神域は潮風に鳴る老松におおわれ、その間に、ツツジ・藤・カツラなどが点在して一層の色どりを添えている。前庭からは眼下に大洗海岸の勝景が一望につくせ、天候に恵まれれば、はるか銚子犬吠崎なども望見できる。

旧暦八月一日の八朔祭と、十一月十日の有賀祭は、この神社の昔ながらの祭りで、有賀祭に三年続けて参詣すれば、必ず中風にかからず、子供は無病息災であるという伝えがある。遠近からの人出でにぎわう。

大洗は、室蘭・苫小牧と東日本を結ぶカーフェリーの基地として面目を一新した。一〇〇〇余段の石段を昇るのは老年族は無理である。筆者は八十二歳であるが、ようやく参詣ができた。

上の写真は大洗磯前神社本殿

常陽明治記念館

神社の裏手一帯は松林で常陽明治記念館がある。土佐出身で明治天皇の側近であった田中光顕が、地元有志の援助をうけて建てたもので、明治・大正二代の御物、維新の志士たちの遺墨・遺品が展示され、そのそばに明治天皇の等身大の像を収める明治聖像殿が並ぶ。

願入寺（がんにゅうじ）

浄土真宗本願寺派　　茨城町下石崎

交通　水戸駅から大洗子供の国行バス簡保センター口下車。

町の北端、那珂川をまたぐ海門橋のたもとから西へ四五〇〇メートルほど入ったところにある。岩船山と号し、弘安二年（一二七九）親鸞聖人の嫡孫如信が東国教化の折り、奥州白河郡（福島県）大網村に一草庵を営み、奥の御坊と名付け、当時の開基とされている。

文安三年（一四四六）八代如慶のとき、兵火にあって諸堂を焼失したため、常陸大根田（現久慈郡太子町）に移り、十二世如正の代に久慈郡久米村（現金砂郷村）へ移転、さらに十五世如高の代の延宝五年（一六七七）、水戸徳川家二代光圀から寺領三〇〇石を賜わり、今の場所に移ってきた。このとき京都東本願寺琢如の子慧明院如晴を招いて寺の十六世住持とした。浄土真宗本願寺派に属したが、現在は原始真宗を称し、その大本山をもって任じている。

境内地は九万九千平方米、堂宇は本堂・庫裏・山門・客殿などを備える。これらの建物は、天狗党の乱の文久三年（一八六四）に焼けたのち再建された。本尊に伝春日作の本造阿弥陀如来立像（県指定文化財）をまつっている。

寺宝類も多く、親鸞聖人自筆の真影（県指定文化財）や唯信鈔断片（県指定文化財）、大根田の奥の御坊にあてて書かれた蓮如の消息（県指定文化財）、水戸光圀作の如信像、如信が使った香合（県指定文化財）と朱漆鐘楼の梵鐘は真鋳だが、東日本一という大きなものである。

また寺の境内付近は、水戸八景の一つ「岩船夕照」として有名なところ。寺のうしろに徳川斉昭が建てた碑がある。

筑波嶺のあなたは暮れて岩船に
　日かげぞ残る岸のもみじ葉

は斉昭の歌である。

上の写真は願入寺本堂

有賀神社

祭神　経津主命

内原町有賀

交通　内原駅下車徒歩三十分。

内原駅の西方約三キロのところに有賀神社（祭神経津主命ほか）がある。貞観元年（八五九）の創建といわれる。例祭は十一月十一日で、その前日古式にのっとり、大洗磯前神社に渡御して祭典をとり行う。これは出雲大社の神寄せの行事にならったものであるが、幼児の虫切りにきくという信仰から、渡御の日には、道すがら子どもを背にした若い母親でにぎわう。

このゆるやかな斜面つづきの西側に、県立コロニーあすなろがある。重度心身障害者の施設だが、この附近一帯は古墳の宝庫である。小型ながら数多くの前方後円墳が点在し、古墳時代後期における豪族支配の一端をのぞかせている。

社殿に人気もなく、さびれている。

薬師寺

天台宗

常北町石塚

交通　水戸駅からバス常北町役場前下車。

寺伝によれば、坂上田村麻呂が国家鎮護を祈願するために、寺院を建てたのがはじまりだという。

鎌倉時代、この地方における天台宗興隆の拠点となった。

昭和三十二年石塚大火で、天文年間に建てられた建物は焼失してしまったが、幸いに木造薬師如来坐像および再脇侍仏立像（国の重要文化財）は、難をまぬかれ、再建された鉄筋コンクリートの本堂に収められている。

坐像はヒノキ材の寄木造、彫眼、厳しくひきしまった面相を持ち、衣文を太めの線できざみ量感あふれる体軀とあわせて、鎌倉新様式を伝える傑作の一つである。

小松寺

真言宗　　常北町上入野

交通　水戸駅から石塚方面行きバス小松下車。

小松寺は緑濃い山村の一角に位置する。寺の創建は、平氏滅亡の哀史にまつわる。平氏の一族の平貞能は、平氏滅亡のおり、主人平重盛の遺骨をたずさえ、常陸大掾平義幹をたよってこの地に逃れた。重盛の後室得律禅尼ともども出家して、この地で重盛の菩提を弔った。

平重盛の墓（県史跡）は、本堂裏手の白雲山の中腹に苔むしている。寺宝の木造浮彫如意輪観音像（国の重要文化財）は、重盛の念持仏で、貞能が遺骨とともに持参したものだといわれる。約八センチ四方の白壇の板に、観音を浮彫りにし、周囲を額縁状にした小品であるが、両頬の肉取りはよくひきしまり、体軀も太づくり、衣文もまた力強く、十一世紀ころの作と考えられる。（一説には、唐代の作品との説もある）。

義勇軍の跡

東茨城郡内原町内原

交通　常磐線内原駅下車二十分。

日中戦争から太平洋戦争にかけて、満蒙開拓青少年義勇軍の名で全国に知られた内原には、農学の府として独自の伝統を持つ日本国民高等学校がある。創立者の加藤完治の遺した学風をしたって、全国各地から農業研究のため集まる若者が多かった。

義勇軍の名は、今はたんなる語り草になろうとしている。農本主義的な考え方を持つ加藤完治は、日本農業発展の場を大陸に求め、昭和十三年四月、国策と合致した大移民事業を興したこれが、満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所である。

主として農家の次、三男を全国からつのり、ここで二、三ヵ月の訓練をほどこし、満州（現中国東北部）および蒙古の各地に入植させた。終戦時までに、その数は八万六〇〇〇人にのぼったという。

敗戦によって、これらの移民事業はすべて烏有に帰し、十五歳から十八歳で大陸に渡った若者たちの悲劇は、推測することさえ困難である。

内原の地もまた、松林のなかに点在した粗末な日輪兵舎（円形の宿泊施設）が姿を消し、学校・工場・住宅などに生まれかわった。

著者は、日本高等獣医学校教授時代、満州国における家畜伝染病防圧のため、学生三十名を引率して北満における二ヵ月間の勤労報国団として、渡満したことがあり、その出発前に学生とともに七日間訓練を受けたことがある。

往時をしのぶものは何一つないが、記念碑だけが建っている。

勤労報国隊東安到着。軍獣医部長・県長らの歓迎。
前列，腕章が筆者，左側６番目。

日本原子力研究所東海研究所

東海村村松

交通　水戸駅日立行バス原電前下車。

昭和三十二年、太平洋岸の松林を切り開いて造成された日本原子力研究所の事業所の一つで研究所の中では最も規模が大きく、原研といえばまずここを指すほど有名である。

面積約二百五十四万平方米の広大な敷地内に、四基の原子炉を廃棄物処理施設・ラジオアイソトープ製造施設などがあり、核融合の研究、原子力に関する基礎研究、放射線利用の研究、研究者、技術者の養成なども行なわれている。

東海原子力発電所

東海村村松

原子力研究所の北隣にある。昭和四十年、わが国最初の商業用原子力発電所として建設されたもので、敷地面積は約二十三万平方米。原子炉のある建物を中心に、発電機がおかれたタービンホール、燃料貯蔵庫、放射性廃液処理建物などが建並び、紅白の縞模様に塗られた排気塔が印象的である。

最大出力は十六万六千キロワット、ここで起こされた電力は、東京電力に売電され、那珂郡那珂町の茨城変電所、新治郡新治村の霞ヶ浦変電所、千葉県野田市の東京変電所などに送られている。また現在、出力百十万キロワットの大規模な第二原子力発電所も完成稼動している。

第四節　笠間市

笠間稲荷神社

祭神　宇迦之御魂命（うかのみたまのみこと）

笠間市笠間

交通　笠間駅からバス笠間稲荷前下車。

京都伏見稲荷、九州の祐徳稲荷とともに日本三大稲荷の一つに称せられ五穀豊穣、商売繁昌、除災招福に効験ありとして、広く信仰を集めている。参道には土産物屋が軒をならべ、年間二〇〇万人近くの参拝者がある。

開基の年代は不明だが、寛保三年（一七四三）笠間城主井上正賀の手によって、神域の整備や社殿の修繕が行なわれた。今の社殿は万延年間（一八五四――六一）に再建されたもので、県の文化財に指定されている。

拝殿に向って右手の藤の老大樹は、県の天然記念物で樹令四〇〇年と推定される。十月から十一月に行なわれる菊まつりは、水戸の観梅とともに県を代表する花まつりで、ともに知られている。菊まつりは丹精こめた約三千本が境内に所狭しと並べられ、菊人形展も開かれる。

笠間稲荷神社の楼門

笠間稲荷神社本殿

笠間城跡

笠間市佐白山

交通　水戸駅から笠間駅行きバス銀行角下車二十分。

神社の裏側から東にすすむと佐白山（百八十二米）に向かう。途中右側に浅野氏の家老大石良欽（良雄の祖父）の屋敷跡がある。赤穂の浅野氏は、笠間城から赤穂に移封された。山麓の公園には、大石良雄の銅像が建てられている。

山頂には宇都宮氏の一族、笠間時朝が元久二年（一二〇五）に築城したという笠間城の城跡がある。この城は、笠間氏のあと、松平・永井・井上・本庄らの譜代大名の居城となったが、延享四年（一七四七）牧野貞通が八万石に封ぜられ、明治維新におよんだ。城跡は時朝築城以来の中世山城の遺構をよく残し近世にいたった。

現在山頂には、佐志能神社が祀られている。江戸期の笠間城櫓（県文化財）は、真浄寺七面堂（日蓮宗）として残されている。

佐志能神社ののぼり口に、民政に努力した藩主牧野貞喜（貞通の孫）の句碑「ふりむくは啼く子の親か田植笠」がある。書は五代後の牧野貞直である。

佐白山の麓には国民保養センターさしろ（市営）がある。明治二十三年（一八〇〇）明治天皇行幸のさいの記念碑などがある。坂東二十三番札所の佐白観音境内には、江戸時代に時間を知らせた時鐘が移されている。佐白観音の裏山「富士山」はつつじ園として知られている。国民保養センターから東にくだったところに、木像佐白観音坐像（県文化財）をまつる玄勝院（曹洞宗）がある。

西念寺

真言宗　稲田山

笠間市稲田

交通　水戸線稲田駅下車。

親鸞は、建保二年（一二一四）領主稲田九郎頼重の招きにより、現寺附近に草庵を結んだ。これが寺の開基とされている。寺観が整えられたのは、四世住持宗慶のころだといわれている。以後、親鸞は約二十年ここを足場に関東、東北地方の教化につとめ、元仁元年（一二二四）に浄土真宗の根本聖典といわれる「教行信証」をここで完成された。

西念寺

寺域は六万六〇〇〇平方米余に達し、うっそうと茂る木立におおわれた参道をたどると、室町期の建物と伝えられる茅葺きの楼門があり、その奥に明治初期に再建された本堂がある。

親鸞聖人が最初に庵室を営んだ場所に建てられたという「聖人廟」がある。ほかに太子堂、庫裡などがある。

第四章　結城市

結城市

人口約五万二千人

県の西端に位し、結城台地の北部を占める商業・田園都市である。市域は鬼怒川とその支流の田川にまたがり、大和時代から麻や穀(こく)の木がよく育つところとして、総(ふさ)の国、「ゆうき」とよばれ、市の周辺に多数みられる古墳のありさまからもわかるように、相当な勢力をもった豪族が居住していたらしい。

結城が歴史の中に現われたのは、鎌倉時代になってからである。関東の名門である小山家（藤原秀郷の子孫小山家）から分かれた結城朝光（初代）がこの地に拠り、関東八大名の一つであった。

鎌倉時代ごろから副業的に織られていた絹織物は、結城氏によって朝廷におくられ、以来、結城紬の名は全国に広く知られるようになった。江戸時代には、藩の積極的な保護と技術の改良によって、製品は江戸に送られ、現在でも、京浜や京阪神に出荷されている。

副業的に行なわれていることと、手作業でつむがれる糸を使い、いざり織りという特殊な技法で織られるために、生産性は低いが、渋味のきいた高級絹織物としての市場性は高い。結城の街中に、結城紬関係の資料を集めた資料館「手緒里」がある。

戦時中、食糧増産のため畑作への転換がなされたが、まだ養蚕は盛んで、桑苗の生産高は全国第一位をしめている。またカンピョウや桐下駄・桐タンスなどの桐材加工も盛んで、製糸・皮革などの工場もある。

結城氏略系図

藤原秀郷……小山政光
- 結城朝光(1)
  - 朝広(2)
    - 広綱(3)
      - 時広(4)
        - 貞広(5)
          - 朝祐(6)
            - 直朝(7)
              - 直光(8)
- 基光(9)
  - 満広(10)
    - 氏朝(11)
      - 持朝(12)
        - 成朝(13)
          - 氏広(14)
            - 政朝(15)
              - 政勝(16)
                - 晴朝(17)
                  - 秀康(18)

結城合戦

足利氏は京都に幕府をひらくと、基氏を鎌倉に居住させて関東管領とし、関東の政務を一任した。代々の管領は独立した分国の経営をおこない、次第に幕府と対抗しはじめた。

応永五年（一三九八）、幕府が重職任用制度として、「三管領四職」制の家格秩序を定めると、関東でも三代目満兼は「関東八館」制の家格を設け、下野の小山・宇都宮・那須・長沼、下総の結城・千葉、常陸の佐竹・小田の諸氏を任命した。四代目持氏は自分を公方、執事を管領と称させて東西間の不和を激化させた。

応永二十三年（一四一六）十月、持氏に反対する前管領禅秀の乱で、佐竹義憲は鎮圧に功労があり、管領上杉憲基の実弟であった関係もあって、関東評定衆の頭人となった。公方と幕府との対立は、管領上杉憲実が幕府と協調して、持氏を追討する永享の乱となり、持氏の戦死でこれは決着がついた。しかし最終的結末にはもう一戦、すなわち結城合戦をまたねばならない。

結城合戦とは持氏の遺児を奉じて公方一門のおこした合戦である。永享十二年（一四四〇）三月、下野国茂木城・常陸国中郡城での挙兵にはじまり、結城氏朝の援護でこれら一党が結城

入城、遺児安王が公方継承者として御教書を発したので、鎌倉府の維持を願う小山大膳大夫広朝・宇都宮等綱・佐竹義憲・小田一族・筑波別当らが出陣し、援兵を送っている。

このころ、東国の豪族はほとんど例外なく、惣領家による庶子家の統制がゆるみ、相続や所領をめぐる同族内部の争いが激化し、一族内にも結城方として応じた以外に、幕府の追討令に呼応して佐竹の庶子家山入祐義・小山讃岐守持家などが攻撃軍に参陣した。公方の遺児と幕府の争いも、私的にみれば惣領家対庶子家の争いであり、この合戦は同族内部の分裂で、旧来の惣領制族団結合の矛盾からくる必然的結果であった。

庶子家側からすれば独立獲得戦であり、惣領家側からすれば威信挽回戦であった。激烈であった結城合戦も、幕府方一〇万の軍勢による包囲で、嘉吉元年（一四四一）四月、城主氏朝などが戦死し、持氏遺児は捕えられて終末となった。

結城家法度

結城の最盛期は、北條氏康とむすんで常陸の豪族小田政治を破り、分国を拡大していた同氏十六代政勝のときである。政勝はこの分国経営の必要から、弘治二年（一五五六）十一月二十五日家中統制の一〇四ヵ條家法を設定した。次代当主晴朝が三條を追加し、家臣十五人の連署をつけて発布した内容が現存している。

内容は侍の統制、領内支配に関する民事・刑事・軍事や裁判など、戦国時代全般の問題点をふくみ、戦国大名家法の典型である。

結城氏の分国は、直轄領と成敗地（属領）よりなる。直轄地は膝の下・洞の中と称され、結城を中心に鬼怒川にそった結城一〇八郷である。属領は結城氏に新たに征服された領域で、結城氏の直接支配権は浸透せず、経済的にも独立単位の地域で、下妻三三郷多賀谷氏、下館三九郷水谷氏、小山一三郷小山氏、長沼一二郷、富屋一七郷などで、結城の支城となっていた。

結城分国とは、このような軍事・政治の連合組織の地域であった。各支城主は結城氏のため軍団を維持し、軍役の義務はあったが、支領内問題には自分で処理できる地位があたえられていた。結城氏は属領内領主の対立を調整、秩序安定を維持、軍役を要求し、平時には支城主の一部を結城宿老として輪番で、本城に勤務させている。

結城城跡

結城市本町

交通　結城駅から徒歩二十分。

結城駅の北東約一キロ米の台地上に残る丘城の跡。空堀・土塁の一部が残存しており、今は一帯が城跡公園とされていて桜も多く、市民の憩の場となっている。

城は鎌倉時代の初め、源頼朝に従って、平家追討戦に軍功をあげ、この地を与えられた結城朝光（初代）の築城と伝える。朝光は、藤原秀郷の後裔という下野の名族小山政光の四男である。

以後結城氏は、代々この城に拠って下総北部に勢威を振るい、室町時代には佐竹氏・小山氏らとともに〝関東八屋形〟の一つとも称されるにいたった。しかし十一代氏朝は、永享の乱（一四三八）で、鎌倉公方足利持氏をたすけて敗れ、永享十二年（一四四〇）持氏の遺子春王・安王を結城城に迎えて兵を挙げた。そして関東管領上杉清方らに辛いられた幕府の大軍に、包囲されること約一年、翌嘉吉元年（一四四一）四月落城し、氏朝とその子持朝は自刃してはてた。世にいう結城合戦である。

そののち、持氏の子成氏は、宝徳元年（一四四九）鎌倉公方になると、氏朝の四男七郎を、成朝と名のらせ結城氏を再興した。成氏が後年古河に移って古河公方を称してからも、結城氏との結びつきは変わらず、十五代政朝は古河公方側の中心的存在として活躍した。

十六代政勝は、小山・下妻方面にまで勢力をのばして戦国大名へと成長し、弘治二年（一五五六）領内支配に関するきまりを定めた「結城家法度」別記を制定した。この「結城家法度」は現存し、戦国大名の領内統治のしくみを知るうえの貴重な史料となっている。

十七代晴朝は、天正十八年（一五九〇）の豊臣秀吉の小田原攻めには秀吉方に参陣し、後年徳川家康の二男秀康を養子に迎えて家督を譲った。が、秀康は、慶長五年（一六〇〇）越前福井へ移封となり、鎌倉時代以来の、下総北部における結城氏の支配は終わりをつげた。

城は廃されたが、元禄十三年（一七〇〇）水野勝長が一万八〇〇〇石で入封し、その居館として再興された。以来水野氏が代々つかえて明治に及んだ。また現市城南部の山川には、元和二年（一六一五）から寛永十二年（一六三五）まで、水野忠元・忠善二代が三万五〇〇石を領して居城していた。

弘経寺

浄土宗

結城市西町

交通　結城駅から徒歩二十分。

文禄四年（一五九五）結城家十八代城主秀康によって建立され、家康・家光などによって保護されて繁栄したのである。

浄土宗の学門所十八壇林の一つで、寺には与謝野蕪村が、滞在中に描いた襖絵や、室町時代に作られた「当麻曼荼羅」『観無量寿経の教えをわかりやすく図示したもの（いずれも非公開）』が所蔵されており、ともに県指定文化財になっている。

また寺内には、蕪村と親交を結んだ俳人、砂岡雁宕の墓（市指定文化財）もある。

弘経寺

弘経寺本堂
（濃い霧雨のため鮮明を欠く）

称名寺

浄土真宗

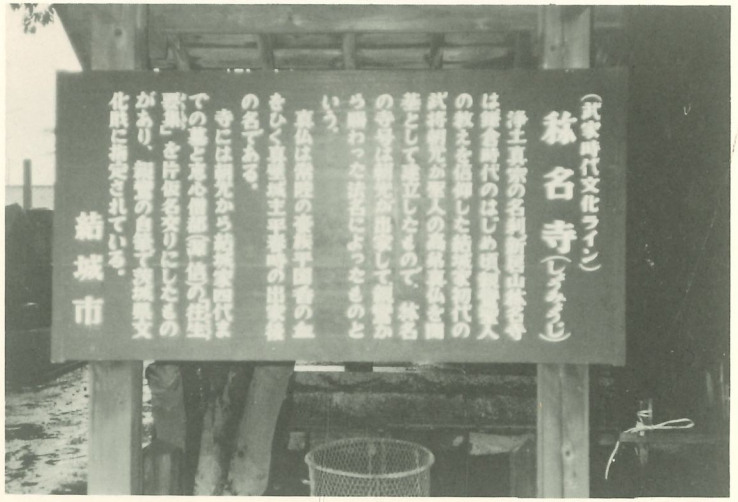
結城市浦町

交通　結城駅から徒歩十分。

浄土真宗本願寺派の結城氏の菩提寺で、建保四年（一二一六）に親鸞に帰依した初代結城藩主、結城朝光の創建になると伝えられている。

寺宝として県指定文化財の親鸞直筆「往生要集（非公開）」、その他に市指定文化財として「結城朝光公肖像画（非公開）」、薬医門形式の「御霊屋門」、総けやきづくりの「二条門」などがある。

称名寺



称名寺由来書

水野忠邦の墓

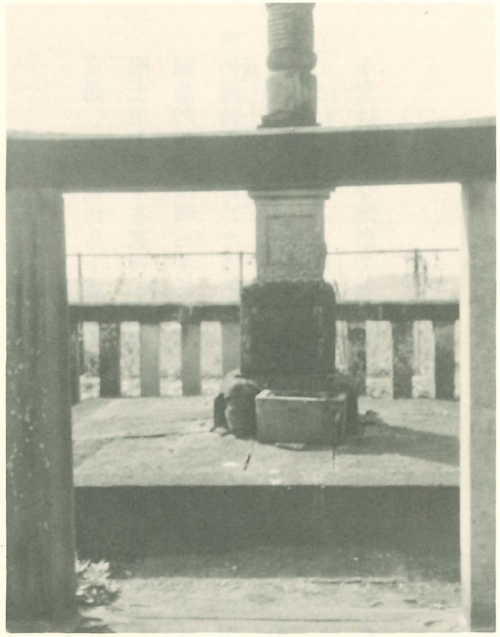
結城市山川新宿

交通　結城駅から下妻行きバス今宿十字路下車。

市域の南端、山川新宿西方の台地に松林に囲まれて、水野家の墓があり、初代忠元から忠邦まで十一代の墓がたっている。とくに忠邦は、老中として天保改革を行なったことでよく知られるが、その家系は、三河刈屋城主水野忠政からわかれて水野忠守を祖とし、その子忠元が徳川秀忠に任え、元和二年（一六一六）下総山川三万五〇〇〇石に封ぜられた。

元和六年（一六二〇）忠元が没すると、その遺体を埋葬して、今の墓所のあたりに壮大な万松寺が建てられた。

しかし水野氏は、のち三河岡崎・肥前唐津と国替えになり、万松寺は廃絶、墓所だけが残り忠邦の時には遠江浜松で六万石を領していた。天保五年（一八三四）老中職に就いた忠邦は、同十二年から天保改革を実施したが失敗、失意のうちに晩年をおくった。忠邦の墓は県の史跡に指定されている。



水野忠邦の墓

水野忠邦の由来書。

大栄寺

真言宗豊山派　　結城市山川新宿

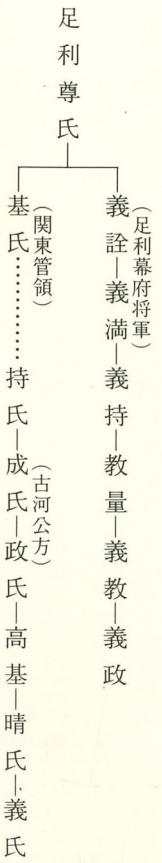
交通　結城駅から下妻行きバス今宿十字路下車。

明王山と号する真言宗豊山派の寺で、一般に山川不動尊の呼び名で親しまれている。開基の年代は明らかではないが、本尊の木造不動明王坐像は、弘法大師の作といわれ、平将門の護持仏であったという。将門の乱のとき、近くの山川沼に沈められたが、のち結城朝光の三男で、山川家を興した三郎重光によって見つけ出され、以来山川氏代々の信仰を集めてきたものと伝えられる。県指定の文化財である。

本堂は大きな伽藍であるが、建物も古く手入れもされず、著しく偉容を欠いている。

第五章　古河市

足利氏略系図



古河公方館跡

古河市鴻巣二丁目

交通　古河駅から栗橋行きバス赤松町下車。

鎌倉時代には、源頼朝の家臣下河辺行平がこの地を支配し、室町時代には、足利成氏が勢力を築いた。

鎌倉公方足利持氏は、永享の乱で将軍義教と争ってやぶれた。持氏の第四子が成氏である。彼は兄三人を永享の乱や結城合戦永享十二年（一四四〇）で失ったのち成氏は、宝徳元年（一四四九）許されて鎌倉公方となったが、執事上杉憲正と対立し、康正元年（一四五五）に鎌倉から古河に移り、古河公方と称した。

古河公方足利成氏は、結城・佐竹・那須・宇都宮・小山・千葉・里見など関東の豪族の支持を受け、上杉氏の擁立する伊豆堀越に拠った将軍義政の子政知の堀越公方と、覇権をかけた戦いを関東の山野に繰りひろげた。しかし戦闘は古河公方側に利あらず、四代古河公方足利晴氏は北條氏康の攻撃を受けて捕えられた。五代義氏は天正十年（一五八二）に世を去った。

現在、古河城跡は、渡良瀬川の改修工事によって水没したが、市内鴻巣二丁目の古河市総合公園には、成氏が築いた鴻之巣御所である古河公方館跡（県史跡）が残り、この北側の徳源院跡には、足利義氏の墓（県史跡）がある。

また、近くの子安地蔵尊（県文化財）は、義氏の一女氏姫が鎌倉から勧請してきたものといわれ、寄木造りで鎌倉期の作とされる金色にかがやく座像で、その慈愛ぶかいおもざしは、非運のうちに滅んだ古河公方の菩提を弔うかのようである。

古河公方館跡

正定寺（しょうじょうじ）

浄土宗利勝山　　古河市大手町

交通　古河駅から徒歩十分。

寛永十年（一六三三）、古河藩十六万石に封ぜられた土井利勝の創建、当誉玄哲和尚の開山と伝える。利勝は天正元年（一五七三）三河刈屋城主水野信元の子として生まれ、のち土井利昌の養子となった。幼時から徳川家康に近侍し、二代将軍秀忠に仕えて老中となり、三代将軍家光には、江戸幕府初代の大老としてその補佐役をつとめた傑物である。

土井氏は利益の代の天和元年（一六六一）志摩鳥羽に出るが、宝暦十二年（一七六二）利里が七万石（のち八万石）で再び古河城主となり、明治維新に及んだ。寺はその歴代の菩提所で寺内には土井一族の墓が現存している。

境内地は約三五〇〇平方米、堂宇は本堂・庫裏・鐘楼・赤門・黒門などを備える。寺宝としては絹本着色土井利勝肖像画（県指定文化財）、利勝が拝領した家康の猿毛の槍のサヤ、利勝の海老胴具足・軍扇・真筆などが所蔵されている。

黒門は、土井家の江戸下屋敷の表門を、昭和八年に移築したもの。江戸時代に建てられた本格的な武家屋敷門である。

また境内には、春日局が家光から拝領した開運弁財天がある。これは、堀田正俊が母の春日局の供養のため、寺に奉納したもので、開運・厄除けに霊験ありとして近隣の信仰を集めている。なお堀田氏は天和元年（一六八一）から貞享二年（一六八五）まで古河城にあり、十万石を領していた。

土井利位の雪の研究

土井利位（一七八八――一八四八）は第十一代古河藩主であるよりも、雪の研究家としての方が有名な学者殿様で、肉眼や虫メガネをたよりに、二十余年間雪の結晶にとりくみ、一九五種の結晶方法を発見した。天保三年（一八三三）と同一〇年（一八四〇）に「雪華図譜」二巻を著わし、それには、丹念に写生した雪華一二五種が収録されている。

今から百数十年も前の研究にしては精密かつ正確で、世界的偉業とまで高く評価されている。彼はこの雪華模様を自由に器物の模様にとり入れることを許し、結城紬の図柄にも使用された。その後、江戸の図案界にこの雪華模様が流行し、一般木綿の衣服や帯地類にまで染められるまでになった。

正定寺本堂

雀神社

祭神　大己貴命（おおなむちのみこと）・少彦名命（すくなひこなのみこと）・事代主命（ことしろぬしのみこと）

古河市厩町

交通　古河駅から徒歩二十分。

今から約一千百年ほど前に、出雲の大社から勧請したものだという。古河公方足利成氏をはじめ、歴代古河城主があつく尊崇し、天下泰平、国土安穏、武運長久を祈願した。昔は祭日に十二座の神楽がおこなわれ、それにつかわれた面は文化時代の名工原舟月の作である。この社の夏祭りには、古河公方成氏のときにはじまったささら獅子舞いが、いまも行なわれている。

伝えによれば、第十代崇神天皇の皇子豊城入彦命が東国鎮定の際祭神をここに創建し、国家鎮護の神として鎮宮（しずのみや）と称えたのを後世訛って雀の宮となったといわれる。上の写真は雀神社

永井寺

古河市西町

交通　古河駅から徒歩二十五分。

正定寺の近く古河城の北にあたり、史跡の多いところで、寺前の三国橋の通りに沿って、藩校盈科堂跡の碑・永井寺・頼政神社・船渡門跡の碑などがある。永井寺は鬼怒川提防に沿ってあり元和八年（一六二二）古河城主となった永井直勝が開基した寺で、直勝の墓をはじめとする永井家の墓所がある。

頼政神社は、永井寺の南、古河城跡北端の土塁にある。源頼政の霊をまつっており、延宝五年（一六七七）城主土井利益が城内鎮護の神として城内に創建し、渡良瀬川の改修により現在地に移されたものである。

上の写真は永井寺

宗願寺

宗願寺

古河市西鷹匠町

交通　古河駅から徒歩十分。

足立山野田院と号する浄土真宗本願寺派の寺で、建暦二年（一二一二）、親鸞聖人の法弟野田西念の開基と伝える。

西念は、信州高井郡井上城主井上五郎盛長の子で、俗名を三郎貞親といった。越後へ流罪中の親鸞に会い、その教化を受けて弟子となり、聖人とともに東国へくだった。聖人が京都へ帰ってからも西念は関東に留まり、布教を続けて一〇八歳で入寂したという。

寺は初め武蔵の国足立郡野田にあり、武州道場とも称されたが、康永元年（一三四二）現寺地に移り、今に法灯を継いでいる。

寺域は約四〇〇〇平方米、堂宇は本堂・庫裏・山門などを備える。本尊は伝恵心僧都作の木造阿弥陀如来立像で、寺宝の室町初期の作とみられる木造親鸞聖人座像は県の文化財に指定されている。

光了寺

真宗大谷派

古河市中田町

交通　古河駅から栗橋行バスで八幡前下車。

若松山と号する真宗大谷派の寺。大同年間（八〇六―一〇）弘法大師空海の開基と伝える。初め武蔵の国高柳村にあって高柳寺といい、真言宗で奉仕されたが、建保年間（一二一三―一九）住職の興悦が親鸞聖人の弟子になって西願と称し、現山寺号に改めた。のち六世悦信のとき今の場所に移ってきたといわれている。

堂宇は本堂・庫裏・聖徳太子堂・山門などを備え、寺宝として木造阿弥陀如来像（伝行基作）・鈴（伝弘法大師所持）・大黒天像（伝弘法大師作）・聖徳太子三歳の木像（伝湛慶作）と伝えられる。

また静御前にゆかりの寺としても知られている。静が夫源義経のいる奥州平泉へ向かったのは、文治五年（一一八九）で、その旅の途中で夫の死を知り、当時高柳寺といった、光了寺に入って、夫の菩提を弔い、その年の九月十五日に、二十二歳でなくなったという。

光了寺

寺に、静が鎌倉鶴岡八幡宮で舞いを舞ったとき、着けていたという蛙螟竜（あまりりゅう）の衣が伝えられている。

鷹見泉石旧宅

古河市長谷町

交通　古河駅の南西約二キロ米。

江戸時代の中期、古河藩主土井利位につかえて政治的手腕を発揮し、家老職を勤めた鷹見泉石の旧宅である。

鷹見泉石は蘭学者としても有名であるが、藩主土井利位が大阪城代、京都所司代として在勤中、京阪に従って活躍し、大塩平八郎が乱をおこしたとき、その鎮圧を指揮したのも泉石である。

洋学を治めていることから世界的な視野をもっており、早くから開国論を唱えていたが、のち、幕府にとがめられて古河に隠棲し、安政五年（一八五八）に没した。海外の地図や地理書の収集家としても知られ、多くの関係蔵書が鷹見家に残されている。

旧宅は粗末な建物で、屋敷には入ることはできなく、写真を撮ることもできなかった。

付記

水戸の梅

水戸は梅の都である。梅の名所は水戸の他にも静岡県の熱海の梅園や、奈良県の月が瀬梅林など数多くあるが、いずれも水戸の梅林にはおよばない。

水戸の梅林は、国の名勝・史跡に指定されている偕楽園と弘道館公園にあるが、古い由緒だけではなく多数の珍種、名木があることもここの梅林の一つの特徴である。

偕楽園一帯には約六十品種、弘道館公園には約二十五品種がある。

偕楽園一帯の梅は、白梅類が多いので清純で楚々とした感じが強く、弘道館公園の方は逆に紅梅類が多いので、華麗で情熱的な感じがする。

銘木には、日影（純白）・八重寒紅（紅）・花香美（淡紅・てっけん梅・一重寒紅（紅）・水心鏡（純白）・紅南所無（紅）など風流な名前のものがある。

水戸市の観梅デーは、有名な年中行事のひとつで、毎年二月末から三月末にかけ、連続四回の日曜日ごとに、華やかにくりひろげられるが、臨時電車をしたてて、各地から押しかけてくる梅見の客は、毎回十万人から多いときは三十万人にものぼり、本格的な春に先がけて、多勢の人出で賑っている。

梅の開花時期は、その年の気候により、必ずしも一定しないし、品種によっても差異があるが普通の八重咲きの冬至梅は、一月下旬に満開になり、江南所無という濃紅色の梅は、三月の下旬から四月の上旬にかけてが見頃である。

水戸納豆

水戸といえばすぐに納豆を思いうかべるほど、納豆は水戸の名産として広く知られている。納豆は、そもそもは中国から伝わったたべもので、とくに鎌倉時代、禅僧によって普及され、「大徳寺納豆」、「天竜寺納豆」などというのがあらわれた。しかしそのころの納豆は、いわゆる塩辛納豆とよばれる乾燥した暗黒色のものであった。

今日のような糸引納豆が作られるようになったのは、江戸時代もかなりくだってからのことである。

水戸納豆の始祖とされているのは笹沼清左衛門である。彼は安政元年（一八五四）水戸で生まれ、幼時から利発であった。あるとき「江戸で好んで食べられるものに糸引納豆というものがあり」と書かれているのを読んで、これを水戸の名産にすることを思いついた。

明治二十一年（一八七四）彼は資料を集めて納豆の製造に着手した。しかし、できた納豆は、

とても売り物になるようなものでなかった。このことで彼に残されたものは、負債だけであった。彼は失敗の原因を冷静に調べあげ、その結論にもとづいてさらに研究を進め、再び製造にふみきった。

明治二十三年（一八七六）春にさきがけて初めて観梅列車が運転された日、彼の苦闘の末に生れた納豆は「天狗納豆」と命名されて売り出された。小粒でやわらかく、ねばりと独得の風味で愛されている水戸納豆が、全国にその名を馳せたのはそれからのことである。

現在水戸納豆は、水戸の名産として、みやげ物の売上げ高第一位を誇っている。

笠間焼

名産笠間焼は、安永年間（一七七二――八一）に、近江国設楽の陶土長右衛門が招かれてここに、カマをおこしたことにはじまる。ここで陶法を学んだ久野半右衛門らが後を継ぎ、本格的な製造をはじめた。以後笠間藩主の保護育成のもとに発展し、今日に至ったものである。

笠間焼としては、当初、水ガメ、すり鉢などの日常生活に密着したものが作られた。最近では、技術の向上とともに笠間粘土の特別な持味を生かし、茶器、花器、食器、民芸品が作られるようになった。二〇〇年にわたる伝統の技術から生み出される笠間焼は、庶民の工芸品だけが持つ渋味と、一種のあたたかさは親しまれ、高く評価されている。

結城つむぎ

結城市とその周辺の農家の副業として、古くから織られた高級絹織物である。真綿から指先でつむいで糸をつくり、絣文様染色のあと、たて・よこ糸ともこれを使って、細かな絣や縞模様を手織りにする。

種類には平（ひら）と縮（ちぢ）の二種類があり、平はたて・よこと無撚の糸を使用し、縮はよこに左右の強撚糸を織り込んだものである。模様は十の字や、亀甲の連続したかすりが基本だが、最近では、花・鳥といった複雑な図柄も織り出されてきた。

反物を織る工程は、鎌倉時代諸国名産に数えられる以前から、連綿と受け継がれてきた手仕事で、イザリ機によって一糸一糸織られる。そのため一反織り上げるのに三ヵ月余もかかり、したがって価格も一反当たり一〇万円から五〇万円という高級ぶりである。なお平織りの技法は、国の重要無形文化財に指定されている。

参考文献

一、茨城県の歴史　山川出版
二、茨城県の歴史散歩同年表　山川出版
三、郷土資料事典　人文社
四、国史年表　日置昌一
五、結城市史　結城市史編さん会
六、古河市のあゆみ　古河史郷土史研究会
七、神社・仏閣の由緒・縁起

著者略歴

明治38年１月，山形県最上郡鮭川村に生まれる。
昭和13年日本大学法文学部文学科を卒業。
日本高等獣医学校教授，さらに日本獣医畜産大学助教授を経て，教授となり国文学講座を担当，昭和47年定年退職，名誉教授となる。
中古文学を専攻，著書に，新註土佐日記・新註方丈記・基礎表記法・東京の名勝史跡五十選・鎌倉の歴史と史跡・千葉の名勝と史跡など。
昭和35年腎臓における自律神経支配に関する研究ほか十数編の研究により東北大学から医学博士の学位を授与せられる。昭和57年４月29日勲四等瑞宝章を受賞した。

編著者との
協定により
検　印　略

県都水戸と御三家ゆかりの史跡

昭和63年１月５日発行
著　　者　佐　藤　　栄
〒297 千葉県茂原市早野１４０６番地
発 行 者　赤　木　賢　而
発 行 所　渓　声　出　版
〒183 東京都府中市武蔵台１丁目15番３号
電　話　0423（64）3760
振　替　東京６－133426
定価 ￥1,500　送料 ￥250